

陳舜臣さんを語る会通信

NO.11

Ju.

2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年6月1日

陳舜臣 中国歴史小説の本線をなす作品の一つ 『山河在り』

陳舜臣さんは、文庫本『中国の歴史 七』(1991 講談社文庫)の「文庫版完結にあたってのあとがき」で次(下の枠内)のように書いています。特に、枠内傍線③「私がほんとうに書きたいのは、くどいようですが近現代であり、残された歳月も考慮して、歴史記述と小説との二つの手段で、それをはたそうと思いました」という表現に、強い気持ちが感じ取れます。その結晶の一つが、本号で取り上げた『山河在り(上)(中)(下)』(1999-00 講談社)で、これは、傍線①の通り、『阿片戦争』、『太平天国』、『江は流れず』に続く、陳舜臣さんの中国歴史もの本線・幹線をなす作品です。

傍線②で、陳さんは「戊戌変法から義和団と書きついで行くべきだった」とおっしゃっていますが、この両事件は『青山一髪』で記述されますので、本線に『青山一髪』を加えてもいいかと思います。

さて、『山河在り』ですが、この作品は、関東大震災(1923年)から日中十五年戦争前夜までを描いていますが、陳さんがおっしゃる、「ほんとうに書きたい近現代」のゴールは、まだまだ先です。この点については、本号4頁でふれたいと思います。

■『山河在り』は講談社『陳舜臣全集』全27巻の巻末に27回連載(1986.5~88.9)された後、中断、10年後に再開、最後の四つの章は「本」に1998.5~99.4の間、連載されました。従って、長い時間をかけて執筆された作品です。

(編集委員 橋雄三)



『中国の歴史 七』(一九九一 講談社文庫)「文庫版完結にあたってのあとがき」より
『史記』の作者司馬遷は、自分の生きた時代、すなわち漢の武帝の時代を書きたいために、さかのぼつて、五帝紀から筆をおこしたといわれています。意識すると否とにかかわらず、誰しも自分の生きた時代に最も強い関心をもつはずです。(中略)
①私は東アジアの近代は、アヘン戦争にはじまると思い、二十数年前に、小説『阿片戦争』を書きました。そして、そのつぎの時代の『太平天国』も小説に書きました。さらに日清戦争をテーマとする『江は流れず』という小説も書きました。

私の故郷の台湾は、日清戦争の結果、清国が日本に割譲した土地です。私はそのころに生まれています。いよいよ私の生きた時代に近づいてきました。
②『江は流れず』のあと、順序からいえば、戊戌(一八九八)変法から義和団(一八九九一九〇一)と書きついで行くべきだったのです。げんに戊戌変法や義和団事件についての資料を集め、小説の構想も練つていきました。けれども、私の胸中に、司馬遷のことが、一種のわだかまりとなっていました。歴史は連続していく、流れているものです。ある一部だけを切り取ることにたいする不満ーというより不安が強まつてきました。

私が『中国の歴史』を書くことを思い立ったのはそのためでした。アヘン戦争から太平天国と、時代をくだつて書き進めていたのが、こんどはさかのぼつてみなければならない、とおもつたのです。正直言つて、当時、馬王堆漢墓の発掘や秦の兵馬俑坑の発見など、考古学関係の大ニュースがつづき、そのことが私の関心を古代にひき戻す作用をしたことは認めなければなりません。けれども、基本的には、私は時代をさかのぼつてみようという意欲にうごかされていました。(中略)

③私がほんとうに書きたいのは、くどいようですが近現代であり、残された歳月も考慮して、歴史記述と小説との二つの手段で、それをはたそうと思いました。(中略)
二十一世紀が近くなりました。同じ時代を生きた人たちと、中国の歴史をふりかえつてみると、私は深いよろこびとしています。

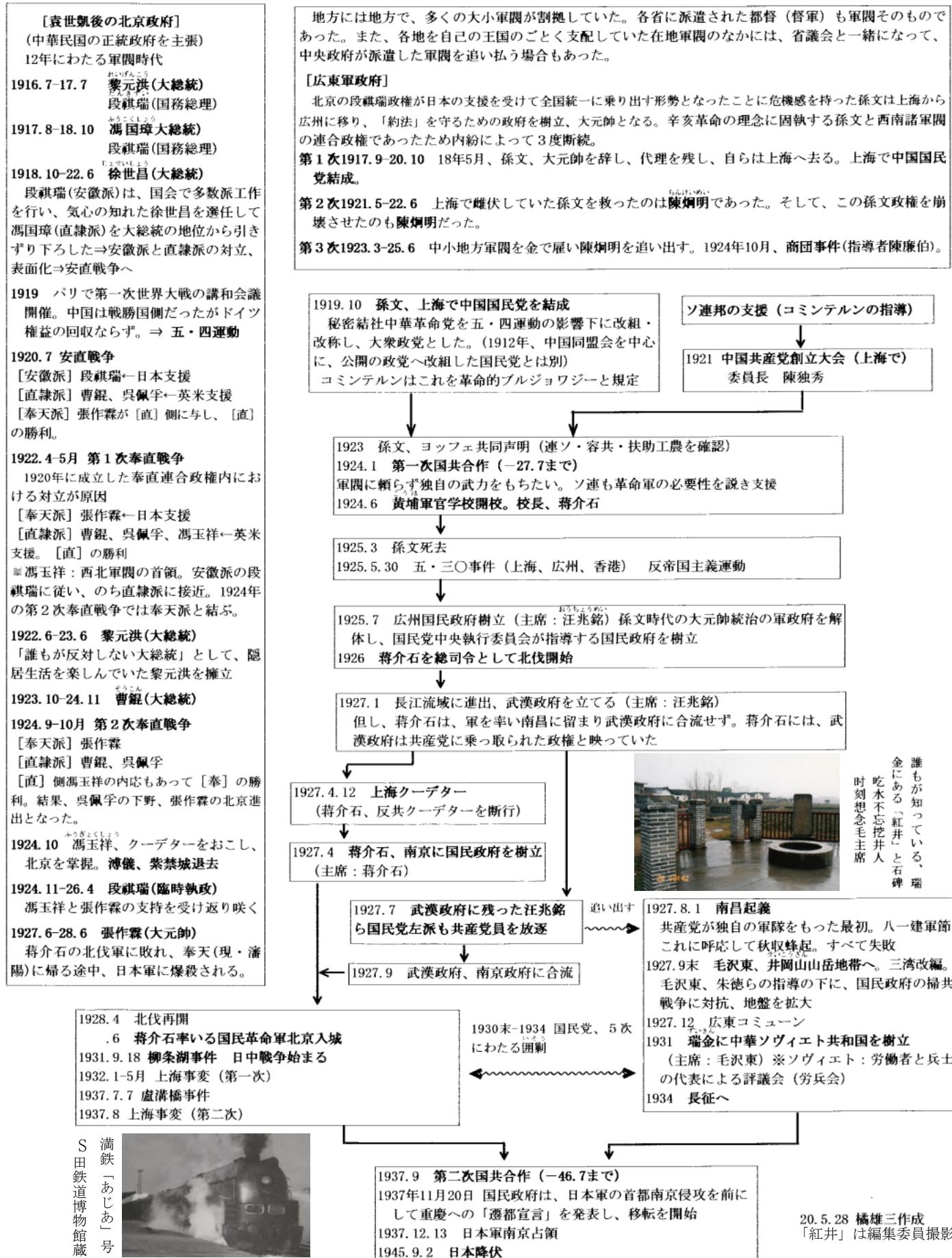
一九九一年二月十八日 六十七回誕生日に

陳舜臣



『山河在り』の時代背景

1912.1～中華民国成立 首都 南京 孫文臨時大總統
 1912.2 袁世凱、宣統帝の退位（2/12）を実現させる。臨時大總統、大總統、皇帝（15.12.12-16.3.22）。16.6.6 袁世凱急死
 1915.1 日本（大隈重信内閣）、二十一か条要求。最後通牒の5月7日は「国恥記念日」に。



『山河在り』の内容（登場人物ほか）

《1. 『山河在り』の登場人物》

『山河在り』の登場人物については、下の表と次ページ、「架空の登場人物 連家・温家系図」を参照願います。

(1) 「同舟会」メンバー

1923年、大震災後の東京。温世航が住む連家の邸、「双煙館」に、同舟会のメンバーが集うところから小説は始まります。

その10人ほどのメンバーが、後にそれぞれ、孫文の広東軍政府と対立する勢力、「商団」に属したり、世航と共同出資して事業を興したり、美しい暗殺者になったり、国民党政府の要職に就いたり、その役割を演じます。メンバーの一人は、大震災後、行方不明になっています。彼はヨッフェの連絡員で、そのことが行方不明に関係しているのではとの噂があります。ヨッフェとはソ連の大物政治家で、1924年の第一次国共合作に繋がる人物です。

(2) 連家・温家、ほか金順記の人々

中国大陸の香港、広州など南方から、上海、北京、そして東北、更に台湾まで、いたるところで起こる出来事を主人公の分身となって情報を収集・提供するのが連家・温家ほか金順記の人々です。

連紹桓は新聞記者となって馮玉祥將軍の本營に入りし、金順記の社員だった徐炳年は黄埔軍官学校を卒業、国民党正規軍の中堅になります。また、連

紹柏は家出をして僧侶になりますが、結果として、紹柏に会いに普陀山までやってきた世航と陶芳韻を再会させる役割を演じることになります。

《2. 陳さんが重く取り上げた出来事》

『山河在り』は上、中巻は共に10章、下巻は11章、合計31の章立てになっています。

まず、「希天失踪」「二通の手紙」、二つの章を割いて、1923年の大震災時の混乱の中で行われた二つの事件（大杉栄事件と王希天事件）が描かれます。大杉栄は著名なアナキスト、社会運動家ですが、憲兵隊本部に連行され、甘粕大尉に殺害されます。

『山河在り』では、この事件をこの時期の状況背景・導入に使いながら、中国出身の社会運動家、王希天について詳述されます。温世航は、王希天について調べる過程で妻になる女性滝口信子と出会います。

次は「五千円始末」

「秋の送別」、二つの章で、孫文の最後の来日と「大亞細亞主義」講演（1924年、神戸）が描かれます。巧みに小説風に仕立てられています。

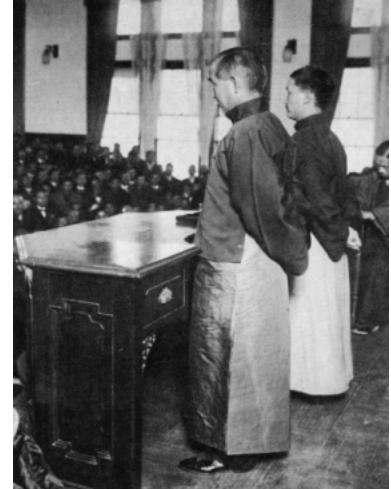
三つ目は、「戦火、上海に及ぶ」「血戦」

「停戦」、三つの章で、柳条湖事件のあとの上海事変が描かれます。その臨場感はさすがです。また、「停戦」の章で、上海の虹口公園で行われた天長節祝賀行事中の爆弾事件にも言及されます。杖について、ミズーリ号上の降伏文書調印の場に臨んだ重光葵外相の不自由な足はこのときの遭難が原因です。

このほかでは、紫禁城収蔵美術品の流出、次々起こる故宮関係者の死、紫禁城景福宮の火災など一連の事件に、元宦官の古美術商高述、世界的陶磁器コレクターのマクミラン、ほか、陸鳴泉などが絡んできます。このテーマは、『青玉獅子香炉』を執筆した陳舜臣さんには自家薬籠中の物と言えるでしょう。

そして、時代背景として、北方の、安直戦争、二度にわたる奉直戦争など、袁世凱後の12年にわたる軍閥戦争、南方の、孫文の広東軍政府と陳炯明のクーデターや陳廉伯の「商団事件」が詳述されます。

また、共産党の創立や国共合作・離反、井岡山・瑞金での国民党との戦いにも言及されます。



神戸高等女学校で講演する孫文
陳徳仁著『辛亥革命と孫文』より

登 場 人 物	
同舟会 メンバー	同舟会は、温世航が住む連家の邸、双煙館に集う中国人留学生の会。吳康、陶芳韻、趙錫堂、劉繼泰、張淑妍、郭浩安、李欽票、唐鼎權、王瑤香
温世航	主人公。「金順記」の一族に生まれ、日本で育つ
陶芳韻	同舟会メンバー。作中、温世航の最初の女性
増田綾子	京都在住の靈感師。温世航の二人目の女性
滝口信子	王希天の知人滝口彈山の娘。温世航の妻になる
連含章	世航の母
連紹桓	上海連家の当主、遠滋の子。新聞記者
連紹柏	台灣連家の当主、遠初の次男。家出をし僧侶に
連如星	世航の父方の祖母。“アメリカ婆さん”
楊景珠	世航のいとこ。米国生まれ。
王希天	中国出身の社会運動家。震災後、失踪
吳康	同舟会。震災後、行方不明。ヨッフェの連絡員？
陸鳴泉	太玄会会長の兄。雅号は雷芽山人
マクミラン	陶磁器の世界的コレクター
高述	元宦官の古美術商

執筆が叶わなかった『山河在り』に続く時代 & 「連家・温家系図」

《陳さんに書いてほしかった共産党及び現代中国》

『山河在り』を読み終わって、「大震災のあと行方不明になった吳康はどこで何をしているのだろう」「秘密工作員陶芳韻とその仲間たちはこのあとどうなるのだろう」などなど、気持ちが残りました。

陳舜臣さんは『山河在り』の中で、簡単にですが、共産党の創立、国共合作・離反、南昌起義、井岡山・瑞金での国民党との戦いなどに言及しています。

共産党的勢力伸張に関連し、陳さんの頭には、引き続き彼らに、次の小説でも登場させようとの構想があつたのではないかでしょうか。

「私がほんとうに書きたいのは、くどいようですが近現代であり、残された歳月も考慮して、歴史記述と小説との二つの手段で、それをはたそうと思いました」。

これは、本号1頁にあげた陳舜臣さんの言葉ですが、『山河在り』に続く時代をテーマにした、本線の歴史

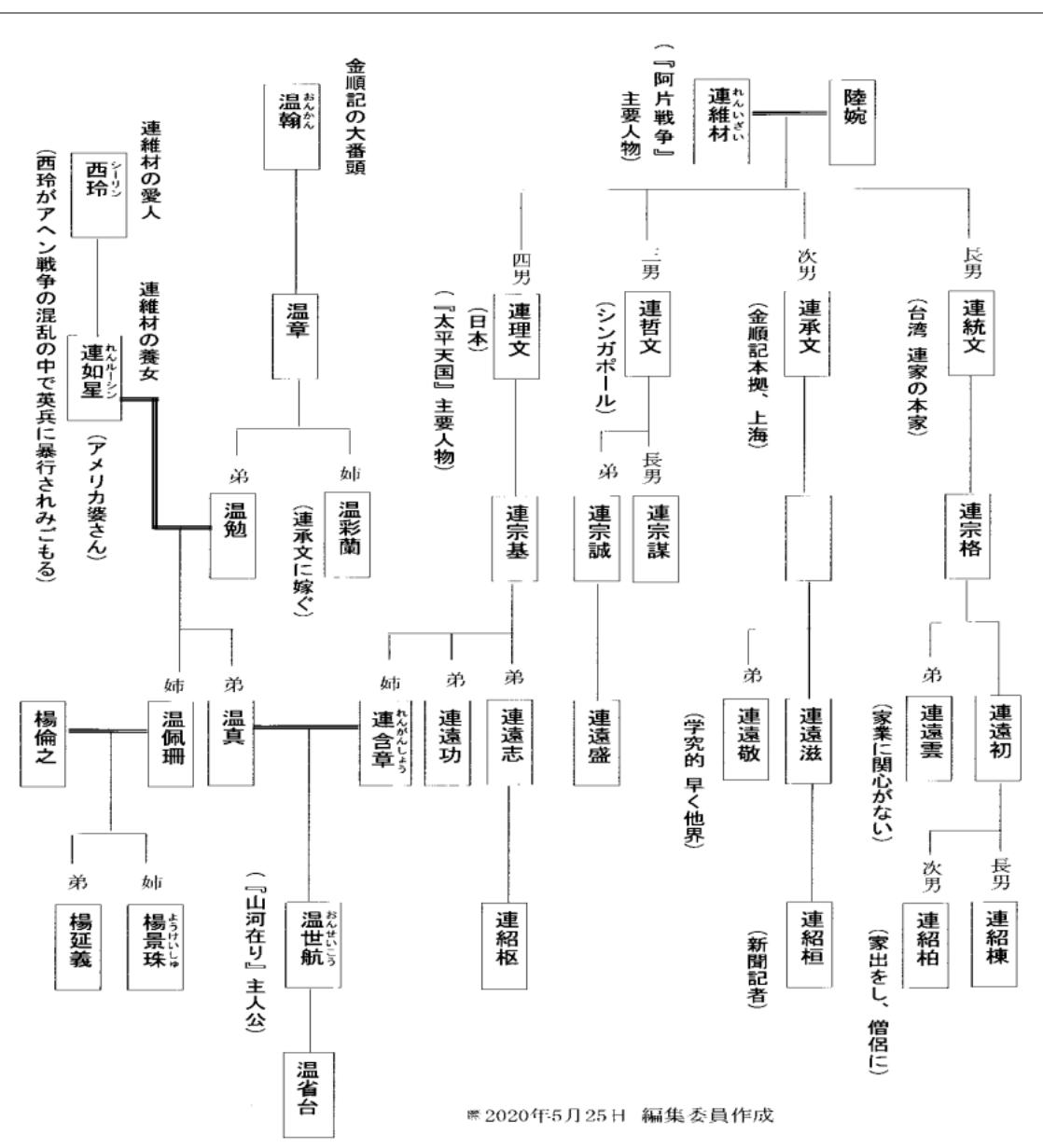


瑞金の「中華蘇維埃共和國臨時中央政府」跡（編集委員撮影）

小説が執筆されることはありませんでした。残念です。

1994年、宝塚歌劇場で講演中にたおれ、五ヶ月の入院、リハビリをしながらの執筆が続きます。阪神淡路大震災もありました。『チングス・ハーンの一族』と『山河在り』が、この時期の所産です。2008年にも同じく脳内出血があり、結果的には、『群像』連載中の『天空の詩人 李白』が絶筆となりました。

架空の登場人物 連家・温家系図



陳舜臣さんの作品、『阿片戦争』『太平天国』『山河在り』に登場する架空の人物、

連家・温家の人がびとを纏めてみました。いざれも、『山河在り』の記述を基本にしております。「長男」、「次男」、「兄」、「弟」なども文中の表現に拠っています。